

◆現代の国語

○読むこと

ア 文章の種類を踏まえて、内容や構成、論理の展開などについて叙述を基に的確に捉え、要点や要旨を把握すること。
イ 目的に応じて、文章や図表などに含まれている情報を相互に関係付けながら、内容や書き手の意図を解釈したり、文章の構成や論理の展開などについて評価したりすることにも、自分の考えを深めること。

「文章Ⅰ」

昔話に、「わらしべ長者」というものがある。

昔、貧しい男がいた。男は観音さまに富を授かるよう祈願した。すると、最初に手につかんだものを大切にせよとお告げがあった。男が最初に手にしたのは何のとりえもないわらしべ(わらの屑)であったが、お告げを信じてこれを捨てずに持ち歩いた。

飛び回るアブをそのわらしべでしばって持ち歩いたら、道行く子供がそれを欲しがったので、その母親が持っていたミカンとわらしべを交換した。すると、のどが渴いて水気のあるものを探していた商人と出会ったので、商人が持っていた半端の反物とミカンを交換した。

次には旅を急いでいるのに、馬が倒れてしまった武士と出会った。そこで、その反物と道に倒れた馬とを取り換えた。幸いにも、馬を介抱したら元気になった。馬を連れていけると、これから旅に出るため馬を欲しがっている人に出会い、馬と引き換えにその人の屋敷に住んだ。ところが、旅人はいつまでたっても帰らなかったで、屋敷は男のものになり、男は裕福になった。

「わらしべ長者」の物語では、特段の努力をせずにただ道を歩いていただけで、つまらないわらしべが最後には高価な屋敷に化けたという、男の驚くべき幸運に注目が集まるようだ。実際、「わらしべ長者」をキーワードにインターネット検索をしてみると、少ない元手で楽をして大もうけというたぐいの話が山ほど出てくる。

話に面白みをつけるにはこれでもよいかもしれないが、この点に気を取られてしまうと、「わらしべ長者」は実直な勤労の美德と価値を否定する、子供には有害な話とみなされかねない。経済学者としては、「わらしべ長者」が労せず大もうけの意味に解釈されるのは大変残念なことだ。

「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」は、経済学の視点で見ると非常に興味深く、有害どころか親子でじっくり味わうべき話だからだ。ここには、自発的な取引によって経済学的な利益が生まれ、「Ⅱ」取引に参加したすべての人たちは利益を受け取ることができる、「Ⅲ」交換による経済学的価値の創造という、教科書の第一章に出てくる経済の基本原則が美しく表現されている。

自発的交換による価値創造の原則は簡単明瞭である。自発的な双方の合意のうえで交換されるためには、交換に応じる双方にとって、交換前よりも交換後の状態の方が好ましいものでなければならず、その差がまさに交換によって得られた価値にほかならない。

話に現れる取引を振り返ると、断ろうと思えば断れるものばかりだったから、話の中でももちろんこの原則は成り立つ。わらしべを家に変えた男が大いに利益を得たことと言うまでもないが、ほかの人たちも利を得ていることを忘れてはならない。

子供にとってはミカンよりはわらしべのおもちゃのほうがはるかに魅力的なものだったから、ただのミカンでも面白いものを手に入れたと喜んだはずである。反物商人も、売れるかどうかわからない余分な着物よりは、ミカンなどを潤すほうがはるかに良かった。死にかけている馬を手放して新しい着物をもらった人は、良い取引をしたと感じたはずだ。旅に出なければならぬ人にとっては、家よりも馬のほうがはるかに貴重なものだったはずである。

このような取引からの利益は、物々交換の世の中ゆえに起こることではなく、金銭を使う現代経済でも同じことであることにも注意しておきたい。たとえば、男は千円でわらしべを売り、その千円でミカンを買ったと話を書き換えればよい。つまり、特定の取引に貨幣が媒介するかどうかということ自体は問題ではないのだ。

②より本質的なのは、専門用語で言う「市場の非完備性」ということである。つまり、登場する人々がそろって共通に取引できる場が備わっていないという点だ。仮に、物語に登場する人々が一堂に会して、さってお互いに物を売買しましょうということになったら、わらしべを持った男が屋敷を手にする可能性はほとんどない。おそらくは、屋敷を持っている人が、馬を買収すると提案したのであろうし、そのほかさまざまなシナリオを考えても、なかなかわらしべには出番が回ってこないのである。

したがって、わらしべを持った男が大もうけできたのは、これらの人々の間では直接に取引できる場が完備しておらず、また取引を媒介できる人物が彼しかいなかったからである。言い換えれば、これらの人たちの間に眠る経済学的価値を引き出すことができるのは、わらしべの男しかいなかったからだ。そういう役割を担った結果、男はもうけるべくしてもうけたのである。

それでは、男がそのような役回りを運だけで手に入れたのだろうか。私はそうは思わない。なぜなら、話の中で男は少なくとも二度にわたり、無視できない重要な経済活動をしているからだ。

第一に、わらしべにアブを結びつけたところだ。確かにわらしべとアブはたまたまタダで手に入ったものかもしれないが、それらを結びつけたことで男はおもちゃを生産したのである。たとえ原価がゼロであっても、人を喜ばせる創造的なアイデアに対価が支払われることに何

らの不都合はないはずである。

第二に、馬を引き取ったところである。馬が息を吹き返したのは確かに幸運であったが、引き取る時点では倒れていて、死にそうであったということが見逃せない要点である。馬に慣れた武士が見放した馬であるから、馬が助からない可能性はあったはずで、しからば男もこれを考慮に入れて交換に応じたはずなのである。言い換えれば、男は馬が死ぬかもしれないというリスクごと馬を買い取ったのだ。すなわちこれは成功するかしないかわからない、リスクの大きい事業に投資をしたことと同じである。リスクをとってなされた投資の成果を享受すること、労働せず富を得ることには大きな差がある。

さて、ミカンと反物については、男は特段の工夫もなく右から左に取引してもうけたと見ることはできる。しかしこれも、何か特殊な出来事が起こったというわけではない。畑で採れた余ったミカンを街中までトラックで運び、道行く人に売ると本質的には同じことだ。ここでは、欲している人の元に物を動かすということは、それだけで立派な経済活動であるということが学ばれるべきなのである。つまり、運送業や小売業がなぜ我々の経済の中で大切な役割を占めているのかを説明する、格好の材料が提供されているのだ。

わらしべを持った男には、もちろん幸運もあった。しかしより大切なのは、男は他人を喜ばすという正当な経済活動を営んだからこそ、利益を積み上げて富貴を得ることができたということだ。ここが「わらしべ長者」にて味わうべき点なのである。

思うに、「わらしべ長者」にある種の嫌悪感ともなう原因は、特定の個人に話の焦点が当たっているためではないか。つまり、そのほかの人たちが、男との取引の結果どれだけ豊かになったのかが書き込まれていないために、男だけ突出して幸運であり、何かあくとい事をしたかのように見えてしまうのだ。

たとえば、わらしべを受け取った子供が、少年時代に体験したアプのおもちゃ遊びのアイデアをヒントにして、大人になって玩具メーカーを立ち上げ、末は東証一部上場の大企業にまで成長するところまで話が続いていたら、わらしべ男の生き方を非難する人は少なからうと思う。

実際、我々はだれしも毎日何らかの労力をさいては、自分が作り出したものではないものを手に入れて、少しずつ利益を積み重ねるという、わらしべ長者的な生活を営んでいるのである。差があるとすれば、それは一度の取引で得られるもうけの程度と質にある。

この点についても、わらしべ男が長者になるためにわずか四回の取引しか要さなかったのは、昔話は簡潔明瞭でなければならぬという制約の産物と見るべきであり、これをして彼が度を越した幸運の持ち主だとみなすべきではないと私は考える。もっと細かな取引を繰り返して利益を積み重ね、そして結果として一国一城の主になったら、それはまさに地道な勤労の美徳の結果として、賞賛されるべきことではないだろうか。

「わらしべ長者」は日本独特の話ではない。世界各国にそれに似た昔話があり、そこに経済学的な考え方の普遍性を私は感じるのである。私の特に好きなのはヒマラヤの国ブータンで語られる話だ。

ある男が畑を耕していたら、宝石が出てきた。すると宝石と馬を交換してほしいという人が現れたので、宝石に興味のなかった男は宝石を手放して馬を得た。次に馬が牛に代わり、そして羊になった。そのような取引を繰り返しているうちに、男の持っているものは鳥一羽になった。すると、その鳥が欲しいけれども、交換するものが何もない。自分の知っている歌を一つ教えてあげるから、鳥をくれないかという人がいたので、男は喜んで鳥と歌を引き換えにした。そして男は歌を口ずさみつつ、幸せな顔をして立ち去って行った。

経済学の理屈では、この男も利益を得たはずだし、実際そうだろう。こういう人物こそ、人生で本当に大きな利益を得られるものではないかと、私は思う。

(『わらしべ長者』の「経済学」梶井厚志より)

問一 傍線部①「この点」とは、どのような点か。次の選択肢ア～エの中から最も適当なものを一つ選び記号で答えよ。

- ア 屋敷は男のものになり、男は裕福になった点。
- イ 男の驚くべき幸運に注目が集まる点。
- ウ 少ない元手で楽をして大もうけするという点。
- エ 「わらしべ長者」をインターネットで検索する点。

問二 「Ⅰ」「Ⅱ」「Ⅲ」にあてはまる最も適当な語句を次の選択肢ア～オの中から一つ選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア しかし
- イ なぜなら
- ウ すなわち
- エ よって
- オ さらに

問三 傍線部②「より本質的なのは、専門用語で言う『市場の非完備性』ということである」とは、どういうことか。次の一文の空欄A・Bにあてはまるように、Aは十二字以内で、Bは三十字以内で答えよ。

わらしべ長者の取引において本質的な問題は(A)という点になく、(B)という点にある。

問四 傍線部③「無視できない重要な経済活動」とは、何と何のことか。二点挙げよ。

問五 次の生徒A・B・Cによる会話文を読み、あとの問いに答えよ。

生徒A 筆者は本文(傍線部④)で「我々はだれしも毎日何らかの労力をさいては、自分が作り出したものではないものを手に入れて、少しずつ利益を積み重ねるというわらしべ長者的な生活を営んでいるのである。」って述べているけど、本当に「だれしも」なのかな…。

生徒C 現代では、物々交換をする機会は滅多にないとしても、どんな人も何らかの収入を得て、貨幣を媒介して消費するよね。だから、みんな、「わらしべ長者的」な生活を送っているんじゃない？

生徒A うーん、そうだけど、その「消費」で気になることがあるの。話すとき長いんだけど…、2013年に起きたバングラデシュの縫製工場での崩壊事故を、知っている？

生徒B え…、知らない。

生徒A そこでは、主に「ファストファッション」のブランドや、誰もが見ているようなパレルブランドの商品が作られていて…。

生徒B 「ファストファッション」って何？

生徒A 私たち先進国の消費者が安いとって喜んで購入する洋服のこと。

生徒B ああ、「プチプラ」ね。

生徒A そこで働いていた人たち1,000人以上が亡くなった。8階建ての1つのビルに5つも縫製工場が入居していて…。ビルの壁や柱にひびが入っていたから退去命令が出されていたのに、ビルのオーナーは「問題ない」って主張して、工場マネージャーも従業員に「仕事に戻らなければ解雇する」って言うて…。

生徒B それで崩壊事故が起きちゃったんだね…。過酷な労働環境の中で、大量の洋服を毎日のように生産して…
生徒A ね…。だから、日本だけじゃなくて、世界に目を向けたとき、「だれしも」が「わらしべ長者的な生活」が営んでいるとはいえないなって思うの。消費者は欲しいものが手に入るとしても、生産者はそのせいで問題を抱えることになるとしたら、本来の「取引」として成立してないんじゃないかって。

生徒C なるほど…。ねえ、「エシカル消費」って知ってる？

生徒A ん？何それ？

生徒C 最近読んでいる「SDGs」の本に載っているから、ちょっと読んでみて(資料①)。

(資料①)

今あなたが着ている洋服は、どこで、誰によって、どのようにつくられたのでしょうか？けさ飲んだ紅茶は？おやつに食べるチョコレートは？おそらくほとんどの人は知らないはず。なぜなら、製品を手にとって見ても、その背景にある情報が開示されることが少ないからです。では、そこで人や環境を犠牲にするような問題が起きていたら？私たちは知らない間に、「買う」という行為を通じて、そういった問題に加担している可能性があります。私たちは日々、なんらかの消費をして生活しますが、毎日着る洋服の原料となるコットンや、コーヒー、紅茶、あるいはチョコレートの原料となるカカオなど、多くのものは途上国でつくられています。その生産の裏側には、労働搾取や児童労働、環境破壊、生物多様性の損失といった深刻な問題が潜んでいます。

これらの問題を解決していくためには、人や社会、地球環境に配慮した倫理的に正しい消費を行う「エシカル消費(倫理的消費)」という考え方が有効です。学生も、企業の経営者も、サラリーマンも、主婦も、どんな人も消費者です。日々の暮らしの中から、買い物を通じて、世界が抱えている問題を解決に導く一端を担うことができます。とても身近なアクションなので、今日から、明日から、誰にでもできます。エシカル消費を生活の中で実践すれば、SDGsの17個の目標のうち、12番目の「つくる責任 つかう責任」という目標を達成するための大きな一歩を踏み出すことができます。

日本では、消費者庁が2015年5月から2年かけて「『倫理的消費』調査研究会」を開催し、エシカル消費の枠組みが行われました。エシカル消費は間口が広く、「エシカル」という大きな傘の下に「フェアトレード」を筆頭に「オーガニック」「地産地消」「障がい者支援につながる商品」「応援消費」「伝統工芸」「動物福祉」「寄付つき商品」「リサイクル・アップサイクル」「エシカル金融」など幅広い消費の形があります。

(『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』『エいきょうを シっかりと カンがえる!』末吉里花)

生徒A へえ！初めて知った！

生徒C 「エンカル消費(倫理的消費)」「資料①波線部」は、『わらしべ長者』の経済学」の筆者が主張する「交換による経済学的価値の創造」にあてはめて考える」ことができるよね。

生徒A そっだねー!」 ア 【よっになれば、「だれしも」が「わらしべ長者的な生活」が営めることになるよね。

生徒B 「経済の基本原則」を意識して「わらしべ長者的な営み」をすることは、「エンカル消費」をはじめ、「SDGs」の背景にあるような地球規模の問題の解決にもつながるかもしれないね。

(問) 【ア】にあてはまる内容を、次の三つの語句を使い六〇字以内で答えよ。

消費者	生産者	自発的
-----	-----	-----

【模範解答】

問一 ウ

問二 I イ II オ III ウ

問三 A 貨幣が媒介するかどうか

B 登場する人々がそろって共通に取り引できる場が備わっていない

問四 人を喜ばせる創造的なアイデアによって単なるわらしべに価値を生み出したこと。

死にそうな馬を引き取ることによってリスクの大きい事業に投資したこと。

問五 消費者が生産者の背景を理解したうえで、消費者と生産者の双方が自発的に交換することによって、お互いに利益が生まれる(51字)